

# 生徒の生活環境の改善から学力向上を図る

～ 生徒や教職員のやる気を高める学校創り ～

大阪市立新豊崎中学校 代表 坂 惠 津 子

## 1 学校の課題

本校は、大阪駅や複数の商業施設を抱える北区の北東部に位置する普通学級6学級、特別支援学級3学級の小規模校である。創立37年目の比較的新しい学校である。以前のように授業を離脱したり、喫煙などの規律を大きく逸脱する生徒はいなくなったものの、授業への関心や意欲がなく机に伏せていたり、周りの生徒と話したりする姿が少なからず見られる。

平成26年度の全国学力・学習状況調査では、どの教科も国の平均を5ポイントから9ポイント下回っており学力での課題があることは明らかであった。また、平成27年4月の校内調査生徒全員を対象にしたアンケート調査では、「午前中の授業に集中して取り組めない」と回答する割合が全体の38%で、症状としては「眠い」「だるい」「お腹が減る」などがあげられていた。12時以降に就寝すると回答した生徒の割合は29%であり、朝ごはんを毎日食べない生徒の割合も22%であった。基本的な生活習慣の育成も課題であった。

しかし、部活動や、体育大会や文化祭などの行事に熱心に取り組む生徒の姿からは、大きく変えられる可能性を見出すことができ、そのために、生徒のやる気を高めることが必要であると考えた。

## 2 研究の目的

これまで、本校でも、生徒の学力向上を目指して、習熟度少人数授業やチーム・ティーチングなどのきめ細やかな指導や授業規律の徹底などに取り組んできた。生活面で一定の成果は見え始めたが、学力向上という点においては未だ十分ではなかった。

一方、学校内を見渡すと、長きにわたって続いた生活指導上の厳しい状況の痕跡が、校内のいたるところに残っていた。これらを日々目にするには、ようやく落ちつき始めた生徒たちにとって良いことではなかった。いくら頑張っても掃除してもきれいにならないトイレや、ナイフで傷をつけられた壁や机は、学びの場として良い環境とは言い難かった。

そこで、生徒の学力向上を目的に、生徒が頑張ろ

うとやる気を高めることができる学校に変えようと、生活の「場」の環境改善に平成27年度から取り組むこととした。

そして、その成果については、全国学力・学習状況調査の結果及び学校アンケート等で測ることとした。

## 3 学校の環境改善の概要

学校の環境整備は、学校の努力でできることと、できないことがある。そこで、表1にあるように、市教育委員会に申請すること、自分たちで努力することに分けて取り組むこととした。

特に、本市には、学校活性化推進事業（校長経営戦略支援予算）として、各学校で定める「運営に関する計画」に掲げた目標達成のため、特色ある学校づくりに必要な事業を計画する学校に対して、500万円を上限として予算が配布される支援がある。学校改革のコンセプトを明確にして、平成27年度、28年度にこの支援予算への申請を行った。いずれの年度も審査において選定され、配当された予算で改修を行なった。

教職員や生徒が行なった内容は、委員会や校長経営戦略支援予算により学校環境が徐々に変化していく中で、学校全体として新しい様々な取り組みが始まり、その過程で、それぞれが工夫を凝らし、意欲的に取り組んだものである。

表1 平成27年度から実際に改修や整備を行なった内容

場所	改修・整備内容	
トイレ	老朽化したトイレは悪臭を放ち、いくら生徒が掃除をしても綺麗になることはなかったが、明るく、清潔感にあふれたトイレに改修された。	委員会
体育館	内壁を全て張り替え、舞台の幕を新調した。また、張り出し舞台、照明装置を新たに購入し、様々な舞台発表に対応できるようにした。	校長経営戦略支援予算
図書室	図書室の暗幕を取り払って室内を明るくし、書架の配置を変えた。本の配置を見やすくし、本の案内も掲示した。協働学習に活用できる机と椅子、電子黒板、プロジェクターを整備した。	

場所	改修・整備内容	
ICT教室	壁面に大きなホワイトボードとプロジェクターを設置した。大阪市が整備したタブレット端末や教師用PCを簡単に使える環境にした。	校長経営戦略 支援予算
理科室	落書きや破損で無残な状態であった生徒の作業台の張り替えをした。	
廊下	<ul style="list-style-type: none"> <li>・読書コーナーとして書架を配備し、学校行事や取り組みに関係のある本を配置し、生徒がいつでも読んだり借りたりできるようにした。また、こども新聞も配備した。</li> <li>・美化委員会が特別教室やトイレなど各教室の前に、みんなが気持ちよく使えるように「使い方の手本」を示す掲示をした。</li> <li>・生徒の学びの足跡がわかる学習物を掲示した。例：短歌、四字熟語、手本となるノートの例、食育の調べ学習の成果物、家庭科での朝ごはんのメニュー作り、美術部の名画の階段アート、家庭科部の学校をモチーフにしたクロスステッチ、美術科の紙粘土で作ったお菓子など</li> </ul>	管理作業員・教員・生徒で行なうこと
校舎外	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒会が校名を記した大看板を、正門正面の校舎の屋上に登校してくる生徒を迎えるよう設置した。様々な個性の集まりを表せるよう5色のカラーで表現した。</li> <li>・美術部が正門に、目玉焼きや味噌汁などの朝ごはんメニューのイラストとともに「朝ごはんを毎日食べよう」という看板を設置した。</li> <li>・塗装のはげたプール周りを鮮やかなブルーで塗り直した。</li> <li>・校舎周りの枯れた草木を取り除き、新しい3段の花壇を正門前と体育館前に整備した。</li> <li>・生徒会と部活動部長会議が、「部活スローガン」を作成し、大看板に描き、運動場を囲むように設置した。</li> </ul>	

平成27年度から2年間の様々な改修や整備により、図1のように校内はきれいになり、図2のように生徒の作品が校舎の多くの場所に掲げられるようになった。



図1 改修前後の体育館



図2 生徒の作品が掲げられた正門

#### 4 環境の改善により始動した様々な取組

学校の環境が大きく変化していく中で、教員や生徒の意識は少しずつ変化が見られた。その中でいくつかの新しい取り組みがスタートした。

#### (1)生徒がいつでも「本」に触れられる環境整備

読書活動と学力とが強い関連関係にあるということはこれまでの国の調査でも明らかである。そこで、生徒が本に親しみやすい環境を整備するために、書架の配置換えをした。生徒が本を手にしやすいよう本を分類し、本の表紙が見えるような配置や、本の紹介文を添えるなどした。また、図3のようにグループでの話し合いに使えるよう六角形の机を配備した。



図3 自由にアレンジできる六角形の机を配置した図書室。調べ学習や共同学習に活用できる

その結果、教科や総合的な学習の時間で図書室を活用する機会が増えた。平成28年度末には、これまで、週1回の開館が、週4回に増え、来室者は706名(昨年431名)貸出数390冊(昨年208冊)と増加した。

平成29年6月の学校の生徒調査から「学校で、教科書以外に読書をしたことがありますか」という問いに対する肯定的な回答の割合は、89.9%(昨年70.9%)と向上した。また、平成29年度の全国学力・学習状況調査からは、図4のように「読書が好き」と回答する生徒の割合が増加している。



図4 全国学力・学習状況調査「読書は好きですか」の回答状況

また、本校は部活動が活発で、放課後図書室に行けない生徒が多いため、図書室以外でも本に触れる機会を作ろうと、図5のような廊下のスペースに図書コーナーを整備した。職場体験学習や修学旅行などの学校行事や取り組みと関連させた本を並べた。休み時間や放課後に、本を読みに来る生徒が少しずつ増え、貸し出しノートに名前を書いて本を借りて帰る生徒もいる。本だけでなく、新聞や、机と椅子を整備することで、この場所は生徒の集う場となり、放課後ここで勉強する生徒の姿も見られるようになった。



図5 廊下の図書コーナー

## (2)「食育」から基本的生活習慣の育成を図る

基本的生活習慣の育成は、学力向上を図る上で重要なポイントである。前述のように、約4割の「授業に集中できない」という生徒の大半が、夕食や就寝時刻が遅いという状況にあった。また「食べる」ことへの意識も低く、平成26年度には学校給食の残食率が50%に及ぶ日もあった。

そこで、よりよく「食べる」ということを学ばせることで、基本的な生活習慣の育成に取り組むことにした。丁度、評判の良くなかったデリバリー給食が、学校調理方式に変わるといふこともあり、学校教育のあらゆる場面で、よりよく「食べる」ことへの取り組みが始動した。校内のいたるところに、図6のような「食べる」ことをテーマにした生徒の作品が掲示されるようになり、教科の時間や、特別活動などあらゆる場面で指導した。



図6 保健委員会が作成した食品群分類表



図7 「食育」の学習で体育館で調理する生徒

総合的な学習の時間では、図7のように現在調理師として活躍する本校の卒業生を講師に招き、「バランスよく食べる」ことの大切さについて学んだ。きれいに改修された体育館では、生徒が実際に調理し、その様子をICT機器を使って体育館のスクリーンに映し出した。全員が試食もでき、楽しく「食べる」ことについて学ぶことができた。

活動後の生徒の作文からは、「普段何気なく食べている食事でも工夫してバランスの良い食事にしようと思った」「栄養バランスの良い食事を家族に食べさせてあげたい」「朝ごはんをいつも食べてなかったので食べようと思いました」などの感想が見られた。一時は50%もあった給食の残食率も、平成28年度末には平均6.4%になり大きく改善した。

また、平成28年度末の全校生徒対象のアンケート調査において、取り組みの成果として「朝ごはんを毎日食べる」生徒は8ポイント増加し84%、「バランスを考えて食

べる」生徒は43ポイント増加し76%、「よく噛んで食べる」生徒は47ポイント増加し88%に改善した。それに合わせて、午前中の体調不良を訴える生徒の割合も図8のように38%から29%に9ポイント減少した。

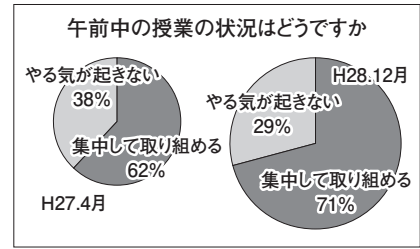


図8 学校アンケート「午前中の授業の状況はどうか」

## (3)ICTを活用し、主体的で対話的な授業へ

学力向上には、教員の授業改善が必須である。しかし授業スタイルを変えることは難しい。しかし、学校の環境を整備することで、今求められている、双方向型の授業や、生徒同士で話し合ったり、自分の考えを表現したりする授業が、実現しやすくなるのではないかと考えた。

そこで、校内にプロジェクターやタブレット端末を整備したICT教室を作った。本市の学校教育ICT推進計画では、各教室でPCやタブレット端末を持ち込んで授業をすることになっているが、これらのICT機器の扱いに慣れていない教員にとっては教室で機器の設定を毎時間することは非常にハードルが高い。そこで、このICT教室では、接続や設定の不安や煩わしさを減らすように工夫した。

このことにより、授業の初めに画像を見せて興味や関心を高めたり、図9のようにプレゼン資料を示しながら考えを発表したり、グループでタブレット端末を囲んで意見を出し合うなどの協働的な授業が見られるようになった。



図9 社会科の授業で調べたことを発表する生徒たち

また、教育指導計画に関わる会議や教員研修ではこの部屋を使用し、統計資料や授業の動画を全員で共有しながら協議するスタイルの会議も増加した。

平成29年度6月の全校生徒対象のアンケート調査では、「授業ではグループで調べたり、考えたことを発表したりする機会があった」と回答する生徒の割合が

97.1%、「授業では、友達と話し合ったり、一緒に考えたりする機会があった」と回答する生徒の割合が96.1%であった。また、平成29年度の全国学力・学習状況調査では、図10のように、「1・2年の時に受けた授業では、生徒の間で話し合う活動をよく行っていたと思いますか」という問いに肯定的に回答した生徒の割合が、平成28年度に比較して大きく増加した。

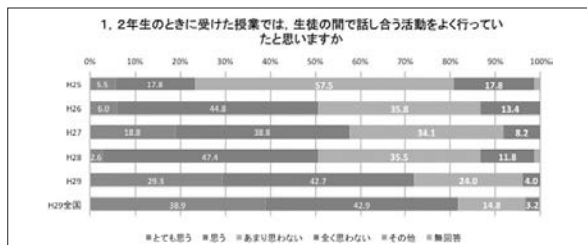


図10 全国学力・学習状況調査で「1・2年の時に受けた授業では、生徒の間で話し合う活動をよく行っていたと思いますか」への回答状況

## 5 明らかになった成果

体育館、トイレ、図書室などがきれいに改修され、新たにICT教室や花壇などが整備されることで、「校内をより美しくしよう」、「こんな取り組みをしてみよう」「新しい授業スタイルにチャレンジしてみよう」のような「やる気」が、生徒や教職員の中に生まれた。様々な取り組みが始まり、校内のいたるところにそれらの成果が掲示されるようになり学校が大きく変容した。

その中で、図11のように「自分には良いところがある」と思う生徒が増加するなど生徒の自己肯定感が高まり、委員会活動や学校行事などで積極的に活動するようになった。



図11 平成29年度全国学力・学習状況調査「自分には良いところがありますか」への回答状況

生徒の、やる気は、家庭での学習時間の増加につながり、学習に対する意識も高まった。

平成29年度全国学力・学習状況調査の教科の調査において、すべての検査で全国の平均値を越えた。

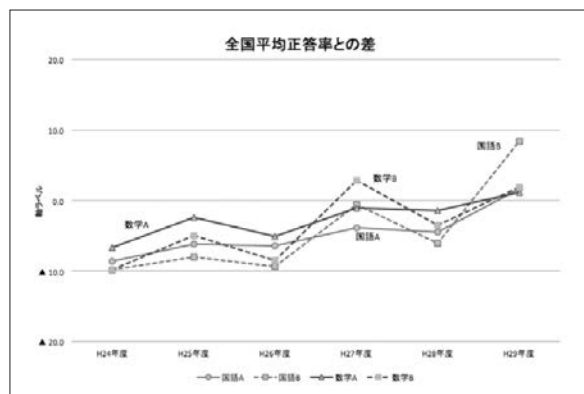


図12 全国学力・学習状況調査の教科調査における全国平均正答率との差の経年変化

## 6 新たな取り組みに向けて

学校施設は、生徒の学習の場であると同時に、一日の大半を過ごす生活の場でもあり、それにふさわしい豊かな環境として整備することの意義は大きい。環境を変えることで、生徒や教職員のやる気が高まり、管理職、教員、事務職員、管理作業員そして生徒が一丸となって様々な取り組みを実現することができた。

平成27年度からの取り組みで、学校のハード部分の課題は概ね解決し、新しいスタイルの授業を実現するための校内環境はもうすでに整えられている。次は、ソフト部分である授業改革である。平成33年度からの新しい学習指導要領の実施を見据えて、これまでの画一的な授業を見直し、生徒が主体的に学んだり、グループで協働的に学んだり、これまでの学びをもとにより深く学べる授業づくりを実現する学校づくりを、教職員が一体になって追求していきたいと考える。



校内研究協議会の様子